

式 辞

春の暖かな陽ざしの降りそそぐこの佳き日に、令和元年度卒業証書授与式を挙げていただくことは、卒業生はもとより在校生、教職員にとりまして大きな喜びであり、深く感謝申し上げます。

全日制課程 234 名、定時制課程 3 名の卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。また、感染症への対策で出席していただけなくなった保護者の皆様には、陰に日向にお子様を温かく育ててこられたご苦労が、今日こうして報われたことに、心よりお祝いを申し上げます。

さて、卒業生の皆さんは忙しい学校生活の中で、勉強と行事や部活動を両立させながら努力してきました。クラスや部活動の仲間と同じ目標に向かって頑張ったこと、喜びを分かち合い、時には壁にぶつかって辛い思いをしたことなど、一つひとつがかけがえのない時間だったと思います。私自身も、篠竹祭での若々しい躍動感、部活動の大会、主体性を育む夏合宿・高校生県議会で県内高校生のリーダーとして活躍する様子、或いは、定時制通信制生活体験発表会など、多くの機会に皆さんの生き生きとした姿を見てきました。その度に、確実に歩みを進め、いつの間にか到達点に上りつめている篠ノ井高校生の自然体の善さと、しなやかな強さを実感しました。これからも、本校で得た仲間とのつながりや思い出を大切にしていきたいと思っています。

「感性が豊かで、小さなことにも関心を持ち、他の人の言葉に共感し、純粹に何かに向かって努力できる。」10 代はそんな素晴らしい時期です。皆さんは意識してこなかったかもしれませんが、たくさんの経験や人々との 出会いを通して、自分がどう生きるかを考えながら、「人」としての土台をつくってきました。そして皆さんの「人としての成長」は、あなたの成長を願い敢えて厳しい助言をしてくれた担任や先輩に導かれたもの、或いは、なかなか分かり合えない、考え方の違う人たちに対して、悔しさや挫折を味わいながら得た成長だったと思います。今日、私が皆さんに伝えたいことは、更に大きく成長するために、「心地よい環境に安住しないでほしい」ということです。敢えて新しい世界に足を踏み入れ、経験したことのないことをして、話をしたことのない人に自分から話しかけ、難しいとわかっていることに挑戦してほしいと願います。

知的好奇心について、海洋生物学者レイチェル・カーソンは、著書「センス・オブ・ワンダー」の中で次のように述べています。『子供たちの世界は、いつも生き生きとして、新鮮で美しく、驚きと感激に満ち溢れている。残念なことに、人間の多くは大人になる前に、澄み切った洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直観力を鈍らせ、ある時には全く失ってしまう』。美しいものを美しいと感じる感性、未知なものに触れた時の感激。それらの感情が知的好奇心を呼び覚まし、抑えがたい心の動きから得た知識・学問は自然に身につきます。しかし、油断した途端に消えてしまうという警告です。若いうちに、生涯消えることのない感性を磨き、いつまでも好奇心を追い続けて欲しい。

日本は、東京オリンピックを迎えます。ますますグローバル化が進み、地域社会や職場でも外国人の方々が増え、AI やロボットの活用が進むなど社会に大きな変化が訪れるでしょう。このような時代においては、多国籍な人々が共に暮らし共に働く社会で積極的にコミュニケーションをとり、考え方や文化の違いを乗り越えて目指す方向へ進めて行ける、「多様性に適応し、共生を形にできる力」が必要だと私は思います。そして、コンピュータ化が進むほどに、一人ひとりの個性、あなたらしさはむしろ価値を増していくはずで、豊かな個性と、グローバルな視野を持って活躍されることを心から期待しています。

このような形で卒業式を迎えたことへの、残念な思いが私にもあります。前例のない未来に向き合い、おそらく皆さんも不安を感じていると思いますが、明日も次の日も、時は変わらず巡ってきます。君たちの逞しい知恵で、日本を、そして世界を頼みます。

令和元年 3 月 1 日

長野県篠ノ井高等学校長 岩田 学